

かながわ異グ連ニュース

広域・地域間異業種交流が活発になっています！！

今月は最近の3件の交流を報告します（6/10新潟、7/11大分、7/23京都）

事務局長 芝 忠

●6月10日（火）、「新潟県先端技術研究会」の“社長会”に招かれ、「神奈川が推進している全国ネットワークや公的補助金申請支援」の講演をしました。同研究会は説立が昭和59年（1984年）と古く、“新潟県の研究開発型企業60社”で構成されています。事務局長が日刊工業新聞新潟支局長の大西勇氏で、同氏もこの職務を20年担当している新潟では大変な名物男です。私は同研究会の設立間もなく、東京で同研究会主催の交流会に参加したことがあり、昨年3月に関東経済局主催の「広域交流会議」で久々にお会いしたことが今回の交流に繋がりました。

燕三条駅前のホテルで開催された“社長会”では、会員企業の動向、社長の個人的経験や意見等が3分間スピーチで発表されました。毎度のこととはいえ結構緊張感があり、そのため一流ホテルの会場を用意するそうです。

同研究会は平成7年に開校された私立新潟工科大学の設立に関与し、多額の設立資金を集めることに貢献しました。全国的にもこうした大きな企画に1異業種交流グループが重要な役割を果たすことは貴重な経験で、地域密着型でかつ有力企業を集めているグループならでのことです。神奈川の全国ネットワーク作りの呼びかけに応じて参加の意思表示をしていただきました。

●7月11日（金）、「大分県異業種団体協議会」の第16回総会に招かれ、記念研修会として「広域・地域間交流の現状と必要性および当面の課題」について講演しました。後半のパネルディスカッションでは“大分県技術・市場交流プラザの大分、日田、佐伯、中津の各地域グループ”が事例発表をしました。大分では地域プラザグループを毎年募集する方法でプラザ事業を継続させています。同一県内でも地域性があり、それぞれ異なった運営を行っています。

「大分県異業種団体協議会」は平成15年度事業計画として“広域異業種交流事業の実施”をあげ、①韓国全北異業種交流連合会との交流、②9月開催の第4回国際異業種交流大会への参加、③私どもが11月に開催する愛媛県今治市の第5回INF大会への参加、④九州・沖縄ブロック大会への参加、⑤技術・市場交流プラザ全国大会への参加、等を方針として掲げています。

このように総会の年度事業計画として特定地域および特定グループとの“広域異業種交流事業”を明確に上げているところはまだ少なく鈴木則夫会長の動議で、神奈川が呼びかけている全国ネットワークに積極的に対応する方向が承認されました。また「当総会に先立ち熊本県協議会の宮村会長の呼びかけで九州各県の協議会代表者会議が開かれ、神奈川提案の全国ネットワークについて議論された」という報告が有りました。九州各県の足並みが揃ってきたという事になりましょう。

●7月23日（水）、「京都異業種交流会連絡会議（異業種京都会）」の第17回総会の記念行事として「講演と交流のつどい」が開かれ、私は「チャンスをつかむ異業種交流の活用法」の演題で神奈川のプロジェク方式の紹介をしながら、改めて全国ネットワークの必要性を訴えました。参加者からは私の話により改めて他地域との交流の必要性を認識したとの感想が聞かれました。

第二部では、府内の4つの活動事例発表がありましたが、“京都試作ネット”は京都を試作開発の基地、すなわち「ものづくり」の拠点をめざそうとする狙いで大変興味を持ちました。神奈川県川崎市の“ものづくり共和国”とも連携しており、「試作開発なら京都で」という合言葉で仕事を確保しようとしています。さらに“新市場開発研究会”や、YAHOOをもじった“KYOHOO”も京都の特色を出したものとして評価できます

当日は京都府内はもとより、岐阜、山口、兵庫、滋賀、和歌山から多数の参加者があり、有益な広域・地域間交流の場となっていました。

以上3府県の取り組みを紹介しましたが、いよいよ「広域・地域間交流」が大きく前面に出てきたな、という確信を持った次第です。

了

京都異業種交流会連絡会議の総会に参加しての感想

異グ連事務局スタッフ 相楽 守

7月23日〔水〕京都ブライトンホテルでの表記会議に芝事務局長とともに参加しました。初めての参加でしたが、(社)京都産業21の小林氏、巽氏(表記会事務局長)そして、京都府地域活性化室山本主任などが、旧知のように迎えてくれました。

芝事務局長は、異業種交流そのものを神奈川方式(宇宙部品、舗装剤、関内プロなど)の紹介と宮崎・米沢等との広域・地域間交流の意義などをまとまりよく紹介しました。その後、地元京都異業種交流グループの4つの事例発表は、いずれも興味深いものでした。若手2世経営者が共同でネットを張り試作を請け負うという「京都試作.COM」等、京都の若い力の将来性や地元の独自性を生かした京都らしさを持つ交流等が大いに参考になりました。

新防食技術活用研究会

田中BC記

7月17日(木)例会で、会員の鋼管計測(株)石沢部長から「腐食問題の事例調査報告」があった。亜鉛メッキの極性逆転腐食で錆びる話、錆びないと信じられているSUS304が塩分の環境ですぐ腐食する例。熱処理をしていない普通のステンレスは腐食の原理を知らないで使うと恐ろしい事になる等の貴重な事例が紹介された。腐食問題は工事施工業者、建設業者、現場作業者等の方が知識、経験が無いために発生している例も多い。中小企業の方に広く知らせる事が重要なことであり、一般向けの防食対策セミナーの開催を検討する事とした。**次回は9月18日(木)で、「ステンレスの腐食とその対策」のテーマで元荏原製作所の本山研二氏の講演を予定しています。**

公的補助金プロジェクト

松井BC記

7月7日(月)の全体会議にて会則並びに運営方法が決まりました。1. 相談事業対応体制を承認。2. 宣伝用パンフレットを作成する。3. 相談担当者の経歴書を揃える。4. 内部研修会を9/28~29の両日、湯河原の万葉荘で開催する。5. 涉外、CD、情報の各事業部は部会を開き、活動計画を立案して活動を開始する。

公的補助金の申請支援はすでに受け付けています。個人、企業の皆様!遠慮なく相談をかけてください!

(例:新事業開拓助成金 7/17~8/22応募)
連絡:045-633-5192 芝、根岸、志村

超強度・透水・保水舗装(新舗装材)プロジェクト

織方BC記

プロジェクトはセインテラスレジンの2次製品への応用展開(例:水処理、緑化、他の建材)の将来像を想定し、会則を修正の上、7月25日(金)第2回目を開催した。当日は岐阜、栃木からの企業も参加し、セインテラスレジンをバインダーとした工程確立を各業種毎に次回(8月26日)までに研究するとともに、保水性試験を「産総研」に研究委託することにした。

三浦深層水事業化プロジェクト

八幡BC記

7月26日(土)“三浦海洋深層水を楽しむ集い”では、深層水は自然食品愛好家には理解されているが、一般市民には余り馴染みが無いので、産学官民の民に軸足を置いた活動の必要性があると確認されました。

<2003 三浦海洋深層水フェアのご案内>

8月9日~17日関連商品展示即売、資料パネル展示
場所:三浦市三崎FW施設うみぎょうプレイス2F
講演会:8月9日14:00~16:00 三浦市民ホール
「海洋深層水の魅力と可能性」
海洋科学技術センター・中島敏光博士

都市(関内)再生プロジェクト

織方BC記

第8回プロジェクト全体会議が、7月17日(木)に開催され、今回は新たにNPO法人3団体も加わりました。内容は、4分科会から月間活動状況の報告と討議が行われ、今夏末までのまとめ目標のうち既にコンセプト分科会は「(仮称)文明開化21th」をテーマとした詳細なレポートがまとまりつつあり、他の分科会も大いに参考になりました。

次回の全体会議は8月19日(火)ですが、その前に「休日の関内地区」を8月3日に視察する予定です。

異業種交流活性化研究会

小野川BC記

7月28日(月)第6回研究会は、第2回に問題提起された「課題解決を目的としたコーディネータの意義」に対し、3人のメンバーから意見・感想を発表し、それに対し全員でコメントを行う方式で進めた。当面研究会は全員がワイワイガヤガヤと意見を交換する方式で進めることとしています。

次回は8月25日am10:00 センター6F特別研修室です。多数の参加を期待しています。

自立社会構築プロジェクト

有村BC記

高齢者などが自立した生活を送る社会システムを目指すプロジェクトです。

7月26日にはメンバー企業の開発機器を利用している、老人保健施設のリハビリ状況を見学しました。8月上旬には大分で開催のバイオフィリアリハビリテーション学会で、産能大学松岡教授がこれまでの活動状況を報告します。これからの高齢化社会のあり方を考えてまいりますので、幅広いメンバーの方の参加をお待ちしております。

韓国(日韓ビジネス協議会)

高橋BC記

第35回定例会が7月30日に開催致されました。内容は1 瀧澤会長の挨拶、2 韓国産業団地公団主催の「2003 神奈川・韓国投資及び技術交流説明会」の報告、3 韓国経済研究センター上田主席研究員の韓国産業経済の動向紹介、4 韓国貿易協会朴支部長の韓国貿易協会の活動内容、5(財)中小企業異業種交流財団の紹介及び最近の異業種活動に関して(芝事務局長)でした。

<2003 国際異業種シンポジウムのご案内>

9月23日 出発
9月24日 韓国産業団地等の工場見学
9月25日 自由行動(市内観光等)
9月26日 2003 国際異業種シンポジウム
9月27日 帰国

異業種交流専門家育成講座

異業種交流スキルアップ及びプロの育成の一環として、第一線でご活躍のコーディネーター及び経験豊富なベテランの方に毎回登場願ひ、実績・経験に基づいた持論を展開いただきます。



今月は2人の先生にご登場をいただきました！！

コーディネーター必要論と中小企業診断士の役割

魚崎誠也

<はじめに>

先の神奈川異グ連総会（6月26日）で山口の小泉氏からコーディネーターは必要なのかどうか、聞き方によっては厳しく聞こえた話が出たので、それについて考察してみた。

結論を先に言えば、山口で事業をされている小泉氏の話は、尤もな話であり、異論のはさむ余地はない。ただ、これから広域・地域間交流を推進するうえでは、やはり、その場にあったコーディネーターを有効に使う方が、成果も大きいのではないかと見える。コーディネーターは診断士ばかりではないが、診断士は助言理論を駆使して異業種交流活動を推進するのが良いのではないかと。

1、コーディネーターとは

コーディネーターとは、今まで色々議論されており、そのおかれた状況によって定義の違うことも解ってきている。要はまとめ役であるから、異業種交流の場では集まった企業主が自分たちで目標がつかめ実行環境があれば、何もコーディネーターなんていらんということも言える。

神奈川での例で行くと、80あるグループの内、成長したグループはコーディネーターなど居ないのではないかと。事務局があるだけで其処にコーディネーターが居るかもしれないが、本来のコーディネーターの役目は終わっているのではないかと。そのようなグループでも発足当時は芝氏がコーディネーターとして活躍し、軌道に乗せようと努力したはずである。そのように理解していると、先日の小泉氏の話は最もであり至極当然の話と受け取れる。

2、世の中は広い

異業種交流とは、正にその言葉どおり異業種の集まりであるから志を同じくするものであればどのような業種が集まってもおかしくない。特に地方であれば昔からの地場産業があるだろうし、志とベクトルが同じ人たちが集まることが容易に想像できる。このような場合、集まった企業主たちの話だけで、大体何処にマーケットがあつてどのような商品が求められているというような話も自分たちで組み立てられるのではないかと想像できる。

しかし、現在狙っている広域・地域間交流にもなると、違う地場産業同士の集まりとも考えられ、お互いがベクトルを一つにする為には、おのずから其処に翻訳家とか通訳が必要になってくるのではないかと。この翻訳家とか通訳の役目をするのが一つのコーディネーターの役目とも取れる。先日の小泉氏の話は前者の場合の話であり、後者の場合もコーディネーターがいらないとはいっていないと思われる。

3、コーディネーターの責任

世の中の何処にマーケットがあつてどのような商品が売れるかが解れば誰でも事業をしたくなる。異業種交流でも、これがハッキリしていればコーディネーターが事業をしても良いのではないかと。そのとおりである。小泉氏も笑いながらであるがおっしゃっていた。

しかし、コーディネーターは人によっては異論があろうが自分では事業をやろうとは考えていない。あくまでも、事業を実行するのは集まってきた事業主の方たちが、リスクの大小はあるが、リスクを負って実行するのが本質である。この点は、活動する前にハッキリさせておく必要がある。コーディネーターによっては、事業主たちの動きが遅いので、つい我慢できずに手を下し、実行主体に入り込む場合が考えられるが、これは危険なことである。

4、中小企業診断士の役割

平成12年に中小企業指導法が中小企業支援法に変わった。ここで代わったのはカウンセリング・コーチングの助言理論が強調された点である。強調されたと言うのは、それまでも必要であったがあまり表に出ていなかったのである。指導法はどちらかという一方的に教えるということであった。支援法に変わって、やる気のある中小企業主が自分でやるのを診断士が横からお助けするようにしたのである。

中小企業主をその気にさせて自分からやるように仕向けると言ってもこれは簡単なことではない。中小企業診断士自身も意識改革が十分でないのに、他人様の事業主の意識改革を外部からするのであるから大変である。

<おわりに>

これから異グ連活動も益々活動範囲を広げて全国大会にまで発展しようとするとき、我々コーディネーターも種々のケースに遭遇することが考えられる。先日、山口の小泉氏の発言はこのよなときの我々の活動に対する良い警鐘になった。小泉氏にはこの場を借りて感謝申し上げたい。

了

異業種交流活動の活性化に想う

鉦鹿 直賢

異業種交流活動を活性化させるには何が必要なのか。交流活動支援経験の浅い小生なので、平成11年に“かながわ異業種交流センター”が実施した異グ連メンバーへのアンケート集計を参考にして少し考えてみた。

交流活動のレベルは参加の目的（動機）によって影響を受けるのではなかろうか。

・交流活動への参加目的が、事業展開の初期段階、即ち人脈づくり、情報収集、視野や知識の拡大にとどまる場合は他からの吸収 (take and take) 志向が強くなる。

自社の経営で何が余剰で何が不足かを明確に把握できていなければ、連携に必要な知恵、労力、資金（経費負担）などの相互扶助 (give and take、give and given) マインドに積極性を欠く虞れがある。活動力低下の危険を孕むことになる。

吸収 (take and take) マインドでは知り合うことはできても、そこから信頼し合う段階に移行できるかは疑問で、この種のメンバーが増えると交流活動は頓挫しかねない。

この手のメンバーへの交流支援は、活動参加目的の高度化即ち情報収集のレベルから、自社から提供できる経営資源を把握できるまでのレベルアップと、それに伴い参加の目的を深化させることが、付け加えられるであろう。グループ共通の目的に対して各メンバーの関わり方をできるだけ均質化することである。

・交流活動への参加目的が事業展開の最終段階にあり、メンバー間の相互信頼関係が醸成されていても、適切な連携先を見出せなければ、グループはサロン化して足踏み状態が続くであろう。次のステップへの動機づけと工程管理的な支援が必要になる。

技術のシーズがあり最終の目的が新製品の開発とその販路開拓にある場合を考えると、技術の高度化 生産手段の確保、原材料の確保、市場サイズの予測、物流手段の確保、資金の確保等々、事業化への検討項目は多岐に亘るが、各項目毎に適切な連携先を見出せるか、項目間の時系列的な連なりは合理的か コーディネータの留意点は多い。

加えて、交流メンバー間の組み合わせ（肌の合い加減）の良否の判断も必要になろう。

吸収 (take and take) マインドの強過ぎるメンバーにはその限界を諭し、相互扶助の意識を植え付けなければならない。

国際環境 社会経済的環境 中小企業施策 地域経済の動向等々から経営革新の必要性を説き、個別企業の限界から連携の意義と重要性を十分に納得して頂く。その前提が無ければ、我々の交流支援活動への取り組みが成果を挙げることの期待は薄い。

とすれば、単なる人脈づくりや情報収集目的の参加者に、スタート前のスクリーニングで参加ご遠慮願うか、交流活動参加を通じてメンバーの意識改革を促すか、であろう。

そこで異業種交流活動のコーディネータに求められる資質は、産・学・官・地域の豊富な人脈 情報ネットワークに併せて

- ・相手の話を聞き出す能力
- ・相手の考えを整理し体系化する能力
- ・相手の課題を整理し順位づけする能力
- ・相手の性格 性向を把握する能力
- ・相手を説得する能力

などと共に・最適解（組合せ）を見出そうとする思考方式、も必要ではなかろうか。

何れにしても異業種交流のコーディネートとは肩の荷が重く感じられるもので、絶えず研鑽を重ねなければならないものようである。

以 上

<編集後記>

異グ連ニュースを発行してから1年になります（創刊号：H14年9月発行）、“はや”というべきか“やっと”というべきか、不慣れゆえに期限に追いまわられて、肝心の「見易く」「正確に」「面白く」「役に立つ」等々へ思い至らず月日が経過してしまいました。しかしその間の皆様の暖かいご支援に心から感謝申し上げます。

異グ連ニュースは会員の皆様、会員外の皆様の「イベントのPR」「新製品・新サービスのPR」「グループのPR」「企業のPR」その他諸々にも、利用いただきたいと存じます。メール、FAX等でお寄せください。

編集委員：小野川利昌 onogawa@hkg.odn.ne.jp tel/fax 044-954-6254

編集委員：相楽 守 mamorusagara@mve.biglobe.ne.jp tel/fax 03-3701-9712